モーツァルト巡礼ーその２

K.518 水谷 康男

前回は、K22：交響曲第５番変ロ長調から、ハイドンの交響曲そして、モーツァルトの旅について触れ、巡礼の旅から、しばし脱線してしまいました。続く K23：アリア「心変わりしないで」あるいは「いつまでも忠実に」(原題:Conservati fedele）という、母が息子との別れに際して思いを歌う弦楽合奏をバックの作品。1675 年 10 月ハーグにて作曲され、翌 1776 年 3 月に初演されています。この全集の CD では、室内合奏団をバックにしたソプラノの歌曲が収められており、その前のトラックは K577、その後ろは K217 ともっと後の作品が収録されていますが、その配曲に違和感がないということに驚きます。ただしバックの合奏部分のレベルは、K577 と比べる、格段にやさしいものです。

K24 は「歓喜の叫びをあげよう」による 8 つの変奏曲。1776 年 1 月にオランダ・ハーグで作曲されたモーツァルト最初の変奏曲です。主題は、ハーグ宮廷の作曲家、クリスチアン・エルンスト・グラーフの作曲によるオランダ歌曲です。このＣＤでは、フォルテピアノを使っていますが、装飾音やトリルが多いことなどから、チェンバロのために作曲したと思われます。モーツァルトは独立した 15 の変奏曲だけでなく、この形式をソナタの第１楽章や第２楽章あるいは最終楽章にも使っているだけでなく（譜面としては残っていませんが）自身の演奏会では即興で変奏曲も弾いているようで、モーツァルトに限らずバッハ、ベートーヴェン、ブラームスなどドイツ語圏の大作曲は、変奏曲がお好きなようですね。

続く K25 も変奏曲です。オランダ歌曲「ヴィレム・ヴァン・ナッサウ」による 7 つの変奏曲。1766 年 2 月にアムステルダムで、カロリーネ・フォン・ヴァイルヴルク王女のために作曲されたものです。ヴィレム・ヴァン・ナッサウ王を歌った、当時オランダではだれにも広く歌われていた歌曲ということです。K24 と同じく当地で直ちに出版されたのです。

K26～31 の６曲は、ヴァイオリンソナタ 第 11 番 変ホ長調、第 12 番 ト長調、第 13 番 ハ長調、第 14 番 ニ長調、第 15 番 へ長調、第 16 番 変ロ長調と続きます。 K25 と同じく 1766 年 2 月にハーグで出版されたので「ハーグソナタ」と呼ばれています。 K26 は ３楽章、ほかの５曲は ２楽章で構成され演奏時間が 6~9 分余りといずれも 10 分足らずの曲で、手持ちの全集ではバロックヴァイオリンとハープシコードとの二重奏です。初版当時（1766 年 2 月）の表書きは「ヴァイオリンの伴奏を伴うクラヴサンのためのソナタ　ナッサウ公ヴァイルブルグ妃に捧ぐ」とあるように、これらもヴァイオリンの伴奏つきのピアノソナタといったものであり、残念ながら、さすがモーツァルトというわけにはいかないものといえます。といっても、終楽章の扱いはメヌエットだったり、ロンドだったり、変奏曲だったりと、新しい工夫が凝らされています。 ピアノ優先の二重奏ではありますが、第 10 番までと較べると、ヴァイオリンの扱いに格段の自由さが加わってきました。

K32 は「ガリマティアス・ムジクム」と呼ばれる、室内オーケストラ用のクオドリベットと呼ばれる組曲の一種で、16~18 世紀にはやった通俗的な雑多な曲を集めたものです。この CD（No.36）では、Janos Rolla 指揮の Franz Liszt Chamber Orchestra の演奏で、No.３を除く 17 曲が収録されています。1766 年 3 月、ハーグでオラニエン公ヴィルヘルム５世の登位の祝典を祝って作曲したものですが、原曲や写本がいろいろな形で残っており、この CD で、No.3 が収録から外れているのも、そのためであると思われます。

実際に聴いてみると、各曲性格も色とりどりで、とても 10 歳の作曲とは思えません。モーツァルトの全作品と比較すれば稚拙かもしれませんが、こうして耳を澄ませて聞けば、素晴らしい作品なのです。ヘンデルの水上の音楽のような曲もあれば、ヴァイオリンソロのとても美しい曲があったりと、各曲が短いだけに、飽きることがありません。

おまけに、またまた脱線しますが、この CD には「セレナータ・ノットルナ」ニ長調K239 と 「ポストホルン・セレナーデ」ニ長調 K320 がカップリングされており、こちらも聴かずにはいられませんでした。演奏は、前者が Gil Sharon 指揮 アマティ室内管弦楽団、後者はジョシュア・リフキン指揮 Cappella Coloniensis といずれも初めて聞く名の団体でしたが、いずれも古楽奏法と思われるメリハリの利いたもので、大いに楽しませてもらうことができました。

K33 は、キリエ へ長調、1766 年 6 月にパリで作曲された数分の佳曲。弦５部と４部合唱という編成。最初の合唱曲で、主題はフランスの歌曲を使ったもの。実際に聴いてみるとあっという間に終わってしまう２分少々の合唱曲ですが、これが 10 歳の作品かと思うほど美しいものです。

K34 は、オッフェントリウム（奉納唱）「天の果てまで登れ」ハ長調。1766 年 12 月末から 3 月までの間にバイエルンのゼーオンで作曲。この地のベネディクト修道院長から 3 月 21 日のベネディクト祭の奉納唱として作曲を依頼されたもの。ヴァイオリン２部とチェロ・バス・オルガンの伴奏で、前半はソプラノ独唱で、後半が合唱よりなりますが、アリアは単純で通俗的として評価の低い作品とされています。しかし、私にはとても聴きやすい印象深いもので、さすが天才モーツァルトと思えました。

次に来るのは、最初の大作 K35 宗教的ジングシュピール「第１戒律の責務」(教会劇の第１部　※全体は３人の作曲家が受け持ち、モーツァルトがその第１部を、第２部をミヒャエル･ハイドンが、第３部をイェタン･アードルガッサーが作曲しました。）です。Ob, Fl, Fg, Hr, Tb と弦五部、通奏低音のオーケストラをバックに３人のソプラノ、２人のテノールが歌います。数分の序曲（シンフォニア）にレシタティーヴォとアリアが７曲、最後はレシタティーヴォに続いて三重奏で締めくくられます。手持ちの CD は、2 枚組で 90 分も罹ります。1766 年の終わりから 1767 年 3 月の間にザルツブルクで作曲されました。作曲と同時に同年３月に初演されました。台詞はドイツ語で、全３部を通してヴァイザーによる作詞で、オペラというよりは一種のオラトリオであり、ジングシュピールです。わずか 11 歳にして、こんな大曲を作曲するなんて！　レシタティーヴォの中には父レオポルドが書いているという部分もあります。後期のオペラから見れば稚拙といわれるかもしれませんが、アリアの経過句などには、時折ハッとするような美しい部分もあり、私はさすがと感嘆するばかりです。これを聴いた 90 分余りは、天才が我々に与えてくれる至福の時そのもので、まさに巡礼の醍醐味でしょう。

続く K36 は、K35 とほぼ同じ編成にティンパニーを加えた管弦楽をバックにテノールによって歌われるレシタティーヴォとアリア「今や義務が」と「かくも偉大で数えきれないのは」です。1766 年 11 月 30 日にザルツブルグに帰ってきて作曲された最初の曲に当たります。大司教シュラッテンバッハ伯の叙階式記念日を祝う祝典の後の伯を讃える盛大な曲です。演奏は K21 と同じ Marcel Reijans T、Wilhelm Keitel 指揮ヨーロッパ室内管弦楽団です。

巡礼は、私にとって散歩でもあります。そして、散歩につきものが道草です。

今年７月予定の都築顧問の講演会の演題が「小林秀雄の詩と真実『モオツアルト』を読む」に決まり、新潮文庫を購入し、改めて一番有名な一節「モオツァルトの悲しさは疾走する」の出典アンリ・ゲオン（高橋秀郎訳)「モーツァルトとの散歩」を手に入れることができました。まだ、第３章の途中ですが、著者ゲオンのモーツァルトへの愛情がひしひしと伝わってきてなりません。その第２章では、最初の道草と称してザルツブルグ市内の表情を紀行文のように語っています。時代は 1930 年前後、世界恐慌 1929 年の時代なのですが、現在のザルツブルクとほとんど変わりないことに驚き、今もその世界が残っていることに安堵もしました。その頃もモーツァルトの生家は名所としてしっかりと存在しており、それ以外にも数々の史跡にあふれており、私は観光ガイドを横においてゲオンが展開するモーツァルトの世界にどっぷりとつかる幸せの時を過ごすことができました。(写真左：モーツァルトの生家　右：モーツァルト 17 歳からの住居)

続く K37 で、初めて聞きなれた心地よい曲に遭遇できました。　ピアノ協奏曲第１番ヘ長調 です。非常に滑らかなピアノ演奏は、Derek Han、ポール・フリーマン指揮フィルハーモニア管弦楽団の演奏で、これは必ずしも古楽スタイルの演奏ではありません（1992 年の録音)。1767 年 4 月にザルツブルクで作曲されました、原曲は他の作曲家のピアノ曲を協奏曲に直したものです。1667 年の混成協奏曲と呼ばれ、第１番 K37、第２番 K39、第３番 K40、第４番 K41 の４曲共に当時パリで活躍する作曲家のクラヴサン曲やヴァイオリン曲をピアノ協奏曲に作り替えたものと判明しています。草稿の筆跡に父レオポルドのものが多く、父の手がどれほど加わっているかという疑問も残っています。

K38 は幕間劇「アポロとヒヤチントゥス」です。ザルツブルグ大学の依頼で 1767 年春に作曲され、5 月 13 日同大学講堂で、ラテン語劇「リディア王の慈悲」の幕間劇として演奏されたのです。第１幕の前に序曲と３曲（レシタティーヴォとアリア)、第２幕の後に３曲、第４幕の後に３曲が演奏されました。劇の時間はわかりませんが、モーツァルトが作曲した音楽の部分だけで 90 分近い大曲です。演奏は Nicol Matt 指揮ヨーロッパ室内ソロイスツで、2006 年の録音です。

K39 は上述のように 1767 年 6 月にザルツブルクで作曲された ピアノ協奏曲第２番変ロ長調 です。楽章順にラウバッハ、ショーベルト、ラウバッハによる室内楽作品からのピアノ（チェンバロ）協奏曲にモーツァルトの手で編曲されたものです。特に第３楽章はとても生気にあふれた曲となっており、果たして原曲はどうだったの

かと考えたりします。
K40 は 1767 年 7 月ザルツブルクで作曲された ピアノ協奏曲第３番ニ長調 です。K39 と同じように、楽章順にR.ホナウアー、G.エッカルト、P.E.バッハの曲をもとにモーツァルトがピアノ協奏曲として完成させたものです。
K41 も 1767 年 7 月ザルツブルクで作曲された ピアノ協奏曲第４番ニ長調 です。K39,40 と同じように、楽章順にR.ホナウアー、ラウバッハ、R.ホナウアーの曲をもとにモーツァルトがピアノ協奏曲と完成させたものです。
以上 K37、K39、K40、K41 の 4 曲のピアノ協奏曲はモーツァルトがオリジナルで作曲したわけではありません。そのため、ピアノ協奏曲全集の CD セットの中には、内田光子／テイト指揮イギリス室内管弦楽団版、アンドラーシュ・シフ／ヴェーク指揮ザルツブルク・モーツァルテウム・カメラータ・アカデミカ など、これら４曲を含めない全集も多いようです。
K42 は、受難カンタータ「聖墓の音楽」です。1767 年春、復活祭の前の週にザルツブルクで作曲されました。当時の大司教は、こんな 11 歳になったばかりの子供が本当に一人で作曲できるものかと、モーツァルトを僧院の一室に閉じ込めて、五線紙とテキストだけを与えて、他人との連絡を絶たせて作曲させたといわれています。序曲はなく３曲のレシタティーヴォとアリアからなり、数年後に４曲目として合唱曲が付け加えられました。演奏はイーデス・ウィーンズ Sp、トーマス・ハンプソン Bs、マルティン・ハーゼルベック指揮ウィーン・アカデミー合奏団、コンチェルト・ヴォカリス Cho（1990 録音）です。

この年（1767）9 月にモーツァルト一家は２度目のウィーン旅行に出かけます。しかし今回は天然痘の大流行もあり、最初のウィーン詣でと違い父レオポルドの思うような成果を上げることができないまま 1969 年 1 月のザルツブルクへ戻りました。ただし、音楽的には最初のジングシュピールやオペラ・ブッファを作曲するなど成果は多大なものがあったといえます。

K43 は、交響曲第６番ヘ長調です。1967 年冬にウィーンで完成。15 分程度の 4 楽章からなる曲です。なお演奏は、交響曲すべて、ヤープ・デル・リンデン指揮アムステルダッム・モーツァルト・アカデミーで、2001~2002 年の録音です。
K44 は、モテット「チーヴィト・エディス（神は養い給うた）」ですが、残念ながらこの全集には収録されていませんでした。また、解説集などにもなく、唯一見つけた CD では、2 分くらいの無伴奏の合唱曲で、現在は、モーツァルトの真作ではないとし、マルティーニ師の手本を少年モーツァルトが筆写したものと推定され、新全集には載っていません。
K4５は、交響曲第７番ニ長調です。1768 年１月ウィーンで作曲された４楽章からなる作品です。演奏時間 12 分余りの小曲で、1968 年１月にウィーンで作曲されました。
K45a として追補された 1923 年上部オーストリア地方ランバッハで発見された変ロ長調の「ランバッハ」交響曲は、その後発見 1965 年に出版された「新ランバッハ」交響曲ト長調ともランバッハにあるベネディクト修道院の書庫から発見され、ともに父子がウィーンからザルツブルクへの帰途ランバッハに立ち寄った際に当修道院に寄贈されたものと思われています。旧ランバッハは父レオポルド・モーツァルト、新バッハはモーツァルト自身の作とみなされており、実際に日本モーツァルト協会のコンサートで 1966 年この 2 曲を日本初演され、あきらかに息子の新ランバッハの方が音楽の流れが自然歌っていたと感じた（属啓成による）そうです。手持ちのＣＤ全集には、この 2 曲は収録されていませんが、幸いにも何年も前の Philips の全集には収録されていましたので聞くことができました。ともに Ob２・Hr２・弦５部の編成で、旧ランバッハは３楽章で、演奏時間 10 分弱、新ランバッハは４楽章で１５分強です。旧ランバッハは確かに考え抜かれた曲であり、新ランバッハは自然に湧き上がってきた曲と感じました。
K46 は、弦楽５重奏曲変ロ長調ですが、筆者不明の筆跡の楽譜の上、セレナーデ K361 の第 1, 2, 3, 7 楽章を抜粋して編曲したもので新全集（ケッヘルの新版）では、外されており、コンサートの CD 全集でも収録されていませんので、今のところ私にとって幻の弦楽５重奏曲です。
K47 は「精霊来たり給え」ハ長調、1768 年ウィーンで作曲されたものですが、そのいきさつは諸説あるようで確定しておりません。演奏時間数分の小曲ですが、終結部で何度も反復される「アレルヤ」がとても印象的です。管弦楽も木管の他にトランペットやティンパニーも活躍して華やかな印象の合唱です。
K48 は交響曲第８番ニ長調で、1967~68 年の第２回ウィーン旅行で作曲された作品です。編成は 2Ob・2Hr・2Trp・Timp・弦５部で、4 楽章よりなる 15 分ほどの曲です。ティンパニーと金管の活躍で強弱の対比が素晴らしく、とても明るく迫力のある曲に仕上がっています。
K49：ミサ・ブレヴィス　ト長調もウィーン滞在中の 1768 年 10~11 月に作曲されました。キリエ、グロリア、クレド、サンクトゥス、ベネディクトス、アニュス・デイの 6 曲からなり、20 分弱の、弦５部とオルガン、独唱４名と合唱で演奏されます。演奏は、K33 と同じニコル・マット指揮、マンハイム・プファルツ選帝侯室内管弦楽団、ヨーロッパ室内合唱団、ガブリエレ・ヴンデラーAlt、ロベルト・モルヴァイ Ten、マンフレッド・ビット

ナーBs、イェンス・ヴォレンシュレーガーOrg で、2002 年の録音です。

K50, K51 と続けて、本格的オペラが作られました。K50 はジングシュピール「バスティアンとバスティエンヌ」、そして K51 はオペラ・ブッファ「見てくれのバカ娘」（La Finta Semplice）です。

前者 K50 は一幕もののジングシュピールで、独語で書かれています。登場人物もバスティエンヌ（羊飼いの娘）とバスティアン（その恋人の羊飼い）とコラ（占いの老羊飼い）のソプラノ、テノール、バスの３名のみ、Ob2、Hr2、弦５部という小編成で、演奏時間も約 40 分とオペラとしては短いものです。1768 年の夏に医師メスマーの依頼で作曲されました。短いイントラーダ（序曲）で始まるのですが、ベートーヴェンの英雄の第１楽章に通じる旋律が入っているのには、驚きました。ベートーヴェンが上手に借りたのではないかと思うのですが？ 実際に聴いてみると、メリハリは少ないが気持ちよいレシタティーヴォとアリアにうっとりとしました。演奏はマックス・ポンマー指揮、ライプチヒ放送交響楽団、ダグマール・シュレンベルガーSop、ラルフ・エシュリヒ Ten、ルネ・パーペ BBr、アントニー・ロルフ＝ジョンソン Ten、1989~90 年録音です。

Bastien und Bastienne

K51 は、３幕もののオペラ・ブッファ「ラ・フィンタ・センプリチェ（見てくれのバカ娘）」です。1768 年にヨゼフ２世の委嘱でウィーンで作曲されたのですが、ウィーンで上演することはできず、初演されたのは翌 1969 年５月１日ザルツブルクのラウテンバッハ大司教の宮殿でした。後年の名作オペラと較べると、いくつかの素晴らしいアリアはあるものの完成度は低く、現在でも上演されることはまれで、私もいまだ体験することがありません。このＣＤでは、指揮：レオポルド・ハーガー、ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団、ヘレン・ドナート Sop、ロベルト・ホル Br、アントニー・ロルフ=ジョンソン Ten、テレサ・ベルガンサ Ms、ユッタ=レナーテ・イーロフ Sop、トーマス・モーザーTen、ロバート・ロイド Bs 他の演奏で、Fl2、Ob2、Fg2、Hr2、弦五部という本格的な編成のオーケストラで演奏されます。序曲（Sinfonia）は、３楽章よりなり、この時代の交響曲と変わることがありません（交響曲第７番（K.45）を改編して（メヌエット楽章を除いて）このオペラの序曲とした）。第 1 幕は合唱から始まり、9 曲のアリアと 7 人全員が歌うフィナーレよりなり１時間以上もあります。

La Finta Semplice

第２幕は７曲のアリアと２重唱とフィナーレ（これがクライマックスといえましょう）から、第３幕は４曲のアリアとフィナーレよりなります。私には、この３幕の音楽の躍動にとても魅せられました。いつか実演で鑑賞したいものです。演奏時間も３時間近い大作でした（CD3 枚）。

こうして、調べては不明なことがどんどん出て来るし、聴いてはこれが 10 歳そこそこの若者が（というか天才が）作ったものかと感激し、といった調子で、このモーツァルト巡礼という至福の時間がこれからも、遅々とした足取りですが、続きます。